

『現代存在論入門』のためのスケッチ(第三部)

倉 田 剛

1. はじめに

現代存在論についての基本的な話題をできるだけ分かりやすく初学者に提供するという目的のもと、すでにわれわれは先行する二つの「研究ノート」を公にしている¹。この「第三部」では、現代の存在論者たちが「トロープ」(個別的性質)と呼ぶ存在論的カテゴリーに焦点をあてつつ、存在論という哲学の基礎分野への導入を行うことにしたい²。個別的性質ないしトロープに関する理論(Trope Theory)は、いまや現代存在論・形而上学の諸理論のうちで重要な一角を担っている。とりわけわれわれが「第二部」で検討した現代唯名論諸説との関連で言えば、トロープ理論は現在そのもっとも有力な説であると見なされている。したがって、この「第三部」は「第二部」との内的な連続性をもつと同時に、それを補完する役割を果たすと言ってよい。また、トロープについて考えることは、何よりもわれわれが「第一部」で言及したメタ存在論的考察を

1 倉田 剛 (2009a)「『現代存在論入門』のためのスケッチ(第一部)」、九州国際大学『教養研究』第16巻第1号、2009年7月、pp.119-171；倉田 剛(2009b)「『現代存在論入門』のためのスケッチ(第二部)」、九州国際大学『教養研究』第16巻第2号、2009年12月、123-164

2 「トロープ」(Trope)という用語自体は、後述するD.C.ウィリアムズが一種のジョークを込めて使い始めた用語であり、その原義を探ることは無意味である。cf., Williams, D. C. (1953), "On the Elements of Being: I", *Review of Metaphysics*, 7, 3-18, Reprinted in Mellor, D. H. and Oliver, A. (eds.), (1997) *Properties*, Oxford University Press, 112-124.

遂行することに他ならない。存在論者たちはどのような意味においてトローブが存在すると主張するのか、トローブというカテゴリーは他のカテゴリーとどのような関係に立つのかといった諸問題は、存在論という理論的営みそのものについての理解を深めることにつながるであろう。むしろ他のカテゴリーを考える際にも、メタ存在論的問題が生じないことの方がむしろ稀である。しかしトローブはわれわれに馴染みのないカテゴリーであるがゆえに、それだけいっそうメタ存在論的な問題を顕在化させやすいという特徴をもつ。こうした意味でもこの「第三部」は、やや特殊な存在論的カテゴリーに話題を限定しているにもかかわらず、「存在論入門」というプロジェクト全体のなかで決して周辺的な位置を占めるものではないことを強調しておきたい。

2. 個別的性質あるいはトローブについて

次のような日常言語における言い回しを存在論的に考えてみよう。

(1) a と b はともに赤い。(Both a and b are red.)

すでに「第二部」で見たように、実在論者たちは、(1) のような言明において、同一の普遍者の例化が表現されていると主張する。すなわち (1) では、同じ〈赤さ〉という性質が a と b の双方によって共有されているということになる。

ノリコ でも、同一の〈赤さ〉といった普遍者を認めたくない唯名論者たちはそれとは別の説明を与えるっていうことだったわよね。

ヨシオ クラス唯名論者たちは、〈赤さ〉の代わりに、赤いもののクラスを使って (1) を説明する。つまり、(1) は結局のところ、 a と b がともに赤いものの

クラスのメンバーであるということを表現しているにすぎない、と。

タカシ 述語唯名論者ってのは、(1) が真であるとすれば、それはたんに「赤い」という述語が a にも b にも適合する（当てはまる）からに他ならないと考える。

ノリコ 類似性唯名論者と呼ばれる人たちもいたわ。彼らによれば、(1) では、同一の性質なんかではなく、 a と b が良く似ているってことが表現されているだけだった。彼らは、典型例や類似性のネットワーク（家族的類似性）を用いることで、普遍者抜きの分類理論を構築しようとしていたわ。

今から検討する理論は、基本的にはこうした唯名論の系譜に属する³。しかしそれは、ある独特の存在論的カテゴリーを要求するという点において、他の唯名論的立場とは区別される。その存在論的カテゴリーは「個別的性質」、あるいは現代形而上学者の好みで言えば「トロープ」と呼ばれる。

ノリコ 「トロープ」って言われてもよく分からないけど、「個別的性質」というのは何だか奇妙ね。だって、今まで性質と言えば「普遍的」なものとして理解されていたから。

この理論の支持者たちは、普遍的でない、すなわち反復されえない特殊な性質が存在すると主張する。彼らに従えば先ほどの (1) 「 a と b はともに赤い」という言明は次のようにパラフレーズされる。

3 「基本的には」と断ったのは、以下で検討する「個別的性質」あるいは「トロープ」に関する理論は、実在論の内部で展開されることもあるからである。

(1*) a の赤さと b の赤さはよく似ている。

類似性に言及するという点において、この理論は、「第二部」で検討した類似性唯名論と緊密な関係に立つが、この理論の独自性は、(1)において、 a と b という対象の他に、〈 a の赤さ〉と〈 b の赤さ〉という数的に区別される二つの個別的な性質が存在すると主張する点にある。

ヨシオ 僕としてはけっこう納得が行くなあ。この絨毯とあのカーテンがともに赤いからって、やっぱり両者の赤さはビミョウに異なるしね。この絨毯に固有の赤さとあのカーテンに固有の赤さは区別されると考えるのはむしろ自然なことだと思う。

個別的性質を一つの存在論的カテゴリーとして認めた最初の哲学者はアリストテレスである(『個別的偶有性』)。アリストテレスが「述語となりえず、かつ基体のうちにある(依存的な)もの」として個別的性質(偶有性)を規定したことについて、われわれはすでに「第一部」のなかで「存在論的スクウェア」を論じた際に簡単に触れている(倉田 2009a, 150ff.)。アリストテレス自身の挙げる例は、〈或る特定の文法的知識〉や〈或る特定の白〉であるが、前者の例についてはイメージがもちにくいと思われるので若干の説明をしておこう。これは「誰その(或る時点における)特定の文法的知識」を意味している。たしかに〈A氏の(或る時点における)ギリシャ語の知識〉は、A氏の知性のうちにある、すなわちA氏の知性の存在に依存するものであり、かつ主語になっても述語にはならないものである。さらに、同じギリシャ語の知識とはいえ、それは〈B氏の(或る時点における)ギリシャ語の知識〉とは区別される何かであろう。かくしてアリストテレスは次のように述べる。

「或る特定の文法的知識は基体としての靈魂のうちにあるが、しかしどんな基

体についても言われぬ、また或る特定の白は基体としての物体のうちにあるが、しかしどんな基体についても言われぬ」⁴。

「基体について言われぬ」とは、〈人間〉といった普遍者（第二実体）とは異なり、個体（第一実体）に述語づけられないという意味である。そして「基体のうちにある」とは、「それがそのうちにあるところのものから離れては有り得ない」ことと同義である。簡単に言えば、「この壁の特定の白はこの壁のうちにあり」とは、その特定の白はこの壁から独立して存在することはできないということを意味する。

われわれは「第一部」において、アリストテレスのカテゴリー・システムの現代版とも言えるJ.ロウの「四カテゴリー存在論」を検討した（倉田 2009a, 157ff）。そこでロウが「様態」（modes）と呼んだカテゴリーは、アリストテレスの「個別的偶有性」や、われわれがここで「個別的性質」あるいは「トロープ」と呼ぶものに相当する。ロウは様態を、〈犬〉や〈惑星〉といった種（kinds）の実例（instance）ではなく、〈赤〉や〈丸〉といった属性（attributes）の実例として規定したことを思い出してほしい⁵。

タカシ 最初はけっこうヘンテコなものだと思ったけれど案外と由緒正しきカテゴリーなんだね。

「ヘンテコ」という言い方は適切かどうか分からないが、今われわれが検討しているカテゴリーのなかにはかなりユニークな対象も含まれる。たとえば、〈ノ

4 アリストテレス（1971）『カテゴリー論』、山本光雄訳、『アリストテレス全集』1、岩波書店、（1a20-1b9）

5 〈犬〉や〈惑星〉といった種の実例は、たとえばボチや土星といったオブジェクトである。それに対し、〈赤〉や〈丸〉といった属性の実例は、〈この赤さ〉や〈この丸さ〉といった様態、すなわちわれわれが「個別的性質」あるいは「トロープ」と呼ぶものである。

リコの微笑み) (Noriko's smile) や<オバマの雄弁さ> (Obama's eloquence) といったものがそうである。また、ふつうわれわれが「関係的性質」と呼ぶものの個別版とも言うるもの、たとえば、<ヨシオのタカシに対する愛> (Yoshio's love of Takashi) などといったものもこのカテゴリーに属すると考えられている。したがって、「個別的性質」はこのカテゴリーの名称としては多少ミスリーディングかもしれない。実際、哲学者たちは実に様々な用語を使ってこのカテゴリーを名指そうと努めてきた。それらのうちの幾つかを挙げるとすれば、次のようなリストが得られよう⁶。

「抽象的個別者 abstract particulars」(スタウト)、「モメント(契機) Momente」(フッサール)、「完全個別者 perfect particulars」(ペルクマン)、「トロープ tropes」(ウィリアムズ)、「個別化された質 particularized qualities」(ストローソン)、「ケース cases」(ウォルターシュトルフ)、「性質事例 property instances」(グロスマン)、「性質子 qualiton、関係子 relaton」(ペーコン) など。

現代存在論においては、D. C. ウィリアムズが提案した「トロープ」という名称が定着しつつある。われわれは、明白な区別が必要となる場合を除いて、「個別的性質」と「トロープ」という用語をほぼ同義のものとして用いることにしたい。

3. 個別的性質の存在

タカシ しかしいったい何を根拠にして哲学者たちは個別的性質なるものが存在すると主張するのかな？

ノリコ 「必要以上に存在するものの数を増やしてはならない」という存在論の

6 Cf., Künne, W. (1983) *Abstrakte Gegenstände-Semantik und Ontologie*, Suhrkamp, p.79; Bacon, J. (2008) "Tropes", *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/entries/tropes>

経済原理に則れば、やっぱり新たなカテゴリーを導入する際にはそれなりの理由を示さなければならないわね。

彼らの要求に応えるために、以下で、個別的性質の存在を主張する代表的な論証を見てくことにしよう。

A 変化からの論証 (Arguments from change)⁷

最初に紹介したいのは「変化からの論証」と呼ばれるタイプの論証である。

- (1) このドレスの赤さはすっかり褪せてしまった。
- (2) (1) が真であるのなら、それがどんなものであれ「このドレスの赤さ」で指示されているものが褪せてしまったはずである。
- (3) 赤いという性質(普遍者)は褪せることはない。
- (4) したがって、「このドレスの赤さ」で指示されているものは、赤いという性質(普遍者)とは異なる。

前提 (1) から (2) へのステップに関しては、次の原理 (SP) が必要である。

(SP) “*Fa*” という主語述語形式をもつ文が真であるのは、“*a*” の指示する対象が存在し、それが “*F*” で表現される性質をもつとき、かつそのときに限る。

ヨシオ 何だかまわりくどい論証だね。(1) が真であって、なおかつ (SP) を

7 この論証と次に紹介する論証(消失からの論証)については、シュニーダーの論文における例を参考にした。Schnieder, B. (2006), “Particularised attributes: An Austrian tale”, M. Textor (ed.), *The Austrian Contribution to Analytic Philosophy*, Routledge, 130-58.

認めるんだったら、ダイレクトに「このドレスの赤さ」の存在が導き出せると思うんだけど。

ノリコ でも、「このドレスの赤さ」で指されているものは普遍的な性質かもしれないでしょ。この論証は、「このドレスの赤さ」で指されているものが普遍者であるという可能性を消去することを目的としているのよ。

B 消失からの論証 (Arguments from disappearance)

次に検討したいのはいわゆる「消失」(disappearance) という現象をもとにした論証である。

- (1) お団子 a とお団子 b はともに丸い。
- (2) a の丸さと b の丸さが同一 (同じにして一つ) であると仮定する。
- (3) いま、a は食べられてしまったが、b は手つかずである。
- (4) a の丸さは消失するはずである。
- (5) b の丸さもまた消失するはずである。((2)より)
- (6) b が手つかずであるにもかかわらず、b の丸さが消失してしまうというのは不可能であるように思われる。
- (7) したがって、a の丸さ \neq b の丸さ。

この論証は、a の丸さと b の丸さが同一だと仮定して (2)、「矛盾」する事柄を導き (6)、最初の仮定の否定 (7) を結論する一種の「間接証明」である。もちろん、(3) から (4) へのステップに問題がないとは言えない。そこでは次の原理が必要となろう。

(OD)x の F 性 (F-ness) は、x が消失してしまえば、同時に消失しなければならない。

タカシ プラトン主義者であれば、この〈OD〉という原理に文句をつけるだろうね。だって普遍者としての〈xのF性〉はxの存在に依存しているわけではないから。

ノリコ それは措いたとしても、何だか〈OD〉は論点先取しているような気がするわ。そもそもF性の個別性を証明したいのに、あらかじめF性の個別性を前提してしまうという。

たしかにそうした印象は否めない。だが、〈OD〉はたんにアリストテレスの言う「基体のうちにある」(基体に依存している)ということだけを述べているだけで、aのF性とbのF性が数的に異なる二つのものであるとまでは主張していないことに注意しよう。もちろん、〈OD〉を認めれば、直ちにこの結論が出てくることは予想されるのだが。

C 知覚からの論証 (Arguments from perception)

三番目に検討したいのは「知覚の対象」という観点からトロープ(ここでは「個別的性質」と言うより「トロープ」と言った方がより適切である)の存在を主張する論証である。

- (1) ヨシオはノリコの微笑みを見ている。
- (2) もし(1)が幻覚でないのならば、「ノリコの微笑み」という表現によって指示されている何かが存在し、ヨシオはその何かと、〈見る〉という関係に立っている。
- (3) (1)は幻覚ではない。
- (4) したがって、「ノリコの微笑み」によって指示される何かが存在する。

タカシ この手の論証は、普遍者の存在を証明しようとする際にもよく登場し

たよね。つまり日常言語の言い回しをもとにして、あるカテゴリーを導出するというやり方だね。でも「ノリコの微笑み」によって指示されるものが個別者であるってことはどうやって分かるのさ。

このことを示すためにはもう一つ別の論証が必要となる。少々くどい論証であるが念のために見ておこう。

- (1) ヨシオはノリコの微笑みを見ている。
- (2) われわれが見ているものは何であれ、それが幻覚でなければ、時間空間のうちに位置していなければならない。
- (3) (1) は幻覚ではない。
- (4) したがって、ノリコの微笑みは時間空間のうちに位置しているはずである。
- (P) 時間あるいは空間に位置するものは何であれ、個別者でなければならない。
- (5) ゆえに、ノリコの微笑みは個別者でなければならない。((4) と (P) より)

「くどい」と言ってしまうえばそうであるが、論証というかたちにこだわれば以上のようになるであろう。結論に至る過程をいちいち書き出さなければならない。しかし、こうした面倒でかつ野暮な作業を行うことのメリットはある。ひとつ前の論証に関して言えば、「aはbを見ている」ということ(およびそれが幻覚でないということ)から、bの存在を導出することの是非を議論することができるし、その次の論証に関して言うならば、(2)や(P)に難癖をつけることも可能である(「可能」ではあってもあまり見込みがあるとは言い難いが)。また、ノリコの微笑みが個別者であることが証明されたとしても、それがテーブルや椅子といった物理的対象とどう区別されるのかが判然としない、と批判す

ることもできよう。さらに、二つの論証に現れる「ヨシオはノリコの微笑みを見ている」という前提がそもそも誤りであると反論することもできる。大切なのは、普段は暗黙のうちに了解している諸前提を明示化し、可能な反論への道を開いておくことだと言えよう。

D 因果性からの論証 (Arguments from causality)

その他にも、因果性に関する言明を用いた論証がある。これは知覚のケースと同様に、ある日常的な言い回しから個別的性質の存在を導くという手続きをとる。個別的性質へのコミットメントを含むと思われる典型的な因果文は次のようなものである。

(α) そのケーブルの脆弱さが橋の崩壊を引き起こした⁸。(The weakness of the cable caused the collapse of the bridge.)

(β) ソクラテスの青白さはクリトンを動揺させた。(Socrates' paleness shook Kriton.)

言明 (α) においても (β) においても、ある因果関係が表現されているように見え、なおかつそれが見せかけでないとすれば、当然、そこで指示されている原因と結果が存在しなければならない。いま (α) と (β) が真正な因果言明だとする。そうであれば (α) において「そのケーブルの脆弱さ」という表現が指示しているもの(原因)が存在するはずであり、同様に、(β) において「ソクラテスの青白さ」が指示するもの(原因)が存在するはずである。

8 Cf., Campbell, K. (1981), "The Metaphysics of Abstract Particulars", P. French et al., (eds.), *Midwest Studies in Philosophy VI*, Reprinted in Mellor, D. H. and Oliver, A. (eds.), (1997) *Properties*, Oxford University Press, 125-139.

ノリコ たしかに〈そのケーブルの脆弱さ〉にしても〈ソクラテスの青白さ〉にしても普遍者としての性質ではないわよね。だって、普遍者は時間空間のうちに存在するものではないから、あるものに対して因果的作用を及ぼすなんてできっこないし。

ヨシオ ふむふむ。だからそれらは個別的な、つまり時間空間のうちに位置を占める性質、あるいはトロープということになるのか。

4. 唯名論としてのトロープ理論

タカシ ところで、個別的性質は他のカテゴリーに属する存在者たちとどのような関係に立つのだろう。今までの話だと、アリストテレスのように個別的性質は、個体に依存すると考える者がいて、ロウのように、それは四カテゴリー・システムのなかで普遍的性質とうまく共存できると考える者もいる。

ノリコ 存在論がカテゴリーのシステムに関する学問だとするならば、当然それは説明されなければならないわよね。

個別的性質についての現代的理論、すなわちトロープ理論はこの問題に関して極めてラディカルな立場をとることで知られている。キャンベルに代表されるトロープ論者たちは、アリストテレスの伝統に反して、トロープを、通常の個体に依存することのない「独立的な存在」(tropes as independent existences)として捉える(Campbell 1981)。さらにキャンベルらは、トロープこそが最も基礎的なカテゴリーであり、他の諸カテゴリーはトロープから構成されるとすら主張する。こうした考え方を始めて提示したのは「トロープ」という言葉の生みの親、ウィリアムズである。

「さらなる段階に向けて踏み出したのはウィリアムズである。これらのケース (cases)、あるいは彼がそう呼んだところのトローブは、存在するものの紛れもない、独立したカテゴリーを形成するだけでなく、それらがまさしく存在の基本要素 (the very alphabet of being) であり、そこから他のすべてのものが構築される (is built) か、さもなければ派生する (derives) ような、単純、基礎的、根本的なアイテム (the simple, basic, primal items) なのである」⁹⁾。

このようにウィリアムズ＝キャンベルにとって、トローブは唯一の真正なカテゴリーである。それでは他の「カテゴリー」はいったいどのようにしてトローブから構成されるのであろう。

ノリコ ちょっと待ってくれない？トローブが「唯一の真正なカテゴリー」だったとしたら、それは「カテゴリー」の名に値しないと思うわ。というのも、「カテゴリー」というのは、世界に存在するものを区分するための最高次概念なんだから、そもそもすべてがトローブだったら、わざわざそれをカテゴリーと見なすことはないと思う。存在するあらゆるものが「対象」であるならば、「対象」はカテゴリーとは見なされないって「第一部」でも強調してたじゃない。

キャンベルがトローブ理論を「単一カテゴリー存在論」(one-category ontology) と呼ぶとき、こうした疑念が生じるのはむしろ当然であろう。しかしながら、「真正なカテゴリー」と「構成された(派生的な)カテゴリー」を区分することによって、この問題をさしあたり等閑視することも可能である。つまり、「構成されたカテゴリー」を疑似的に認めることによって(それらのカテゴリーに属する対象の存在を含意しない)、「唯一の真正なカテゴリー」をあたかも区分概念であるかのように扱うのである。

9 Campbell, K. (1990), *Abstract Particulars*, Basil Blackwell, xi.

ヨシオ うーん、何だか釈然としないなあ。

釈然としない気持ちは分かるが、とりあえずトロープ論者による「構成」の問題を考えてみよう。ウィリアムズによれば、いわゆる個体（ソクラテスやこの椅子）は「トロープの和」(the sum of tropes) として構成される(Williams 1953, 118)。たとえばソクラテスはくソクラテスの賢さトロープ+ソクラテスの人間トロープ+… というトロープの総和である。伝統的には独立した存在だと見なされてきた具体的な個体（実体）は、いまやトロープに依存的な存在であると捉えられるのである。キャンベルは次のように言う。「それら（具体的個物）は共在するトロープの集まり（collections of co-located tropes）であり、ある船隊がその構成要素である船たちに依存しているのと同様に、これらのトロープに依存しているのである」(Campbell 1981, 128)。

タカシ なるほど。僕たちが個体と呼んでいるものは船隊のようなものなんだ。たしかに船隊は、個々の船から構成されているし、それらに依存的な存在だと言える。そしてここで個々の船として捉えられているものこそトロープである。このように考えれば、目の前にある白いテーブルは、白トロープ、円トロープ、三脚トロープ、大理石トロープなどなど無数のトロープから構成されたものであるってことになるね。

ノリコ でも、個体というのは何らかの「まとまり」をもつものでしょ。無数のトロープの集まりが個体だと言っても、どうやってそれらが一つの「まとまり」を構成するのかしら。

この「まとまり」あるいは「統一性」(unity)の問題は、個体を扱う章でふたび検討することになるが、案外と厄介な問題である。なるほど実体-属性理論 (substance-attribute theory) を採用すれば、少なくとも「統一性」をめ

ぐる困難は生じない。というのも、それは一つの実体(基体)が様々な属性(性質)を例化するという理論的枠組みをもつからである。しかしトローブ理論は、個体に関してこれと対立する立場、すなわち束理論(bundle theory)を採用する。個体を属性の「束」として捉えるこの立場に「統一性」の問題はつねにつきまとう。まさに「束」を束ねる「ひも」のようなものはあるのか、あるいは「接着剤」のようなものはあるのか、という問題である。トローブ論者たちは、「同時発生」(concurrent)や「共現前」(compresent)や「共在」(co-located)という言葉を使って、複数のトローブが一つの個体を構成する事態を説明しようとする。つまり彼らによれば、時間空間的に同じ位置を占める複数のトローブを一つの「まとまり」と考えるのである。

ヨシオ ふむ。たしかに一つの船隊は、同じ時間に、比較的近い空間内に散らばっている複数の船から構成されている。

ノリコ でも、それらの船のあいだに船隊とは関係のないボートや漂流物が入り込んでいたらどうなるの?それらも船隊を構成する要素として数えられるわけ?

タカシ 船隊の「まとまり」ってそんなに単純なものかな?たとえば、第X艦隊ってものがあるとして、それを構成している戦艦や空母は複数の海域で同時にある作戦を遂行していたとする。つまり、トローブ論者たちの言う「共在」とは程遠い配置をもっている。それでも第X艦隊の「統一性」というのは失われることはない、と言うか…。

最後の問題はかなり難しいもので、たんなるトローブ理論への反論というよりは、むしろ束理論一般への反論となりうるものだろう。また、それは「メレオリジカルな和」(mereological sum)と呼ばれる全体概念に対する疑念を提

起すると言ってもよい。しかしここでは、少なくとも「共在」という考え方には多くの困難が伴うということを理解できれば十分である。

ノリコ トロープによる個体の構成の問題はおおよそ理解できたけれど、普遍者の構成はどのような手続きで行われるのかしら。

具体的な個体がトロープの和あるいは集まりとして構成されるのに対し、伝統的に「普遍者」と呼ばれてきたものは $\dot{\text{トロープのクラス}}$ (集合) として構成される¹⁰。たとえば、人間 (性) という普遍者は、{ソクラテスの人間トロープ, ナポレオンの人間トロープ, …} というクラスであると捉えられる (Williams 1953)。

ヨシオ そうだとしたら、赤 (性) という普遍者は、無数の赤トロープをメンバーにもつクラスとして構成されるということになるね。{このリングの赤トロープ, あのポストの赤トロープ, …} という。

ノリコ この考え方は「第二部」で見た「クラス唯名論」の発想とは随分異なるような気がするわ。クラス唯名論は伝統的に「普遍者」と呼ばれてきたものをクラスに還元しようとしたけど、その際、人間 (性) という普遍者は、{ソクラテス, ナポレオン, …} という個々の人間をメンバーとするクラスに還元されたはずよ。赤 (性) だったら {このリング, あのポスト, …} という赤いものをすべて集めてきたクラスになるはず。

普遍者の構成の仕方に関して、クラス唯名論とトロープ理論は大きく異なる。

10 和 (sum) とクラス (class) を混同してはならない。一般的に、和とクラスの違いはその「構成要素」との関係にある。和はその構成要素と部分関係に立つのに対し、クラスはメンバーシップ関係を立つ。

前者は個体からなるクラスによって普遍者を構成することにより、それを解消しようとするのに対し、後者はトローブからなるクラスによって普遍者を構成し、最終的にはそれを消去してしまうことを目論む。しかしいずれにせよ、普遍者を消去しようとする点において、トローブ理論は、クラス唯名論と同様、唯名論の陣営に属する理論である。したがってトローブ理論は、唯名論が孕んでいた困難の多くを引き受けざるをえないことは容易に想像できよう。次節でわれわれは、トローブ理論をおもに實在論の立場から批判的に考察することを試みたい。

5. トローブ理論の批判的考察

現代を代表する實在論者として知られるアームストロングは、唯名論者のなかでも独特の立場に立つトローブ論者を「個別主義者」(Particularists)と呼ぶ。そしてこの個別主義者に対して次のような疑念を提出する。

「個別的なものの性質および関係がそれ自体、個別的であると議論するとき、個別主義者〔トローブ論者〕たちは普遍者の問題を解決してはおらず、たんにそれを先送りしているにすぎない」¹¹。

前節で見たように、トローブ論者は普遍者をトローブのクラスに還元できると主張する。たとえば赤という普遍者は以下のような赤トローブのクラスである。

赤 = {赤トローブ₁, 赤トローブ₂, 赤トローブ₃, ...}

11 Armstrong, D. M. (1978), *Nominalism and Realism: Universals and Scientific Realism vol. 1*, Cambridge University Press, 82. 強調は引用者による。

しかし、これらの赤トロープたちはいかにして一つのクラスのメンバーとして数え挙げられるのであろうか。アームストロングは問う。「いったいどのような原理に基づいてこれら個別的なもの(赤トロープ₁, 赤トロープ₂, …)が一つのクラスに集められるというのであろう」(Armstrong 1978)。このアームストロングの疑問は、たしかに目新しいものではないが、一定の説得力をもつ。複数の赤トロープはまさに赤という性質(普遍者)を共有することによって一つのクラスのメンバーとなるのではないか。あるクラスのメンバーであるがゆえに、ある性質をもつという主張は倒錯しているのではないか。

ノリコ トロープ理論が普遍者の問題を「先送りしている」というのはまさにこのことなのね。つまり、彼らは赤トロープたちを集めて一つのクラスを作り、それによって普遍者を消去しようとしているけれど、そうしたクラスを作るためには赤という普遍者が必要となるわけで…。

タカシ 「第二部」でも検討されたけれど、唯名論者としてのトロープ論者たちは、普遍者の例化という原理ではなく、類似性という原理に訴えるんだよね。

その通りである。彼らは、トロープのあいだの類似性のもとづいてクラスを形成することができると考えている。先ほどの例で言えば、赤トロープ₁と赤トロープ₂は、同一の赤という(普遍的)性質を共有することによってひとつのクラスに集められるのではなく、互いに類似しているがゆえに同じクラスに入れられる、と。この意味において、トロープ理論は「第二部」で検討したクラス唯名論および類似性唯名論と深い関係に立つ。

ヨシオ ここでも同一の性質が類似性を決定するのか、類似性が「同一の性質」なるものを構成するのかという難問が生じるわけだね。

実在論者は、少なくともトロープ論者の言う「類似性」自体は個別的なものではない、と反論することができる。また、「a と b が似ている(類似している)」というのは何らかの観点からなされるものであり、そうした観点(色やかたち)自体は普遍者であると反論することもできよう。

ノリコ そうよねえ。このリングとあの郵便ポストが似ていると言われるとき、〈色〉という共通の観点からそう言ってるわけで、そうした観点がなければその二つには何の類似性も見いだせないわ。トロープ論者であれば、このリングの赤トロープとあの郵便ポストの赤トロープが似ていると主張するかもしれないけど、問題はまったく同じだわ。たとえ二つの赤トロープが互いに異なる個別者だとしても、それらの赤トロープに着目させるような高次の観点〈色〉は消去するのが難しい。

最後にもうひとつだけ実在論者による興味深い反論を挙げておこう (cf., Armstrong 1989, 129)。(この反論は、トロープ理論だけでなく、類似性の哲学一般に向けられた反論である。)極端な想定であるが、この世界にはたった一つの対象 a しか存在しないとしよう。もちろん a は他のいかなる対象にも類似していない(比較する対象がそもそも存在しないのだから!)。このようなケースにおいても、a が性質をもちうると考えるのは自然なことであろう。つまり、類似性がないところでも、ものが性質をもつと考えることは十分に可能なのである。アームストロングはこうした反論を展開したうえで次のように述べる。

「ものの性質を規定するのはそれらの類似性ではない。[...]むしろものの性質こそがそれらの類似性を規定するのである」(ibid., 129)

ここで言われる「性質」とは普遍者のことに他ならない。トロープ間の類似性であれ、個体間の類似性であれ、類似性によって普遍者を消去してしまう

とする唯名論的試みは、アームストロングのような実在論者たちにとって、完全に転倒した試みなのである。

それでは実在論者にとって、トロープあるいは個別的性質というカテゴリーはまったく不要なカテゴリーであるのか。次節では、実在論という枠組みのなかでトロープを擁護する立場を検討したい。

6. 実在論とトロープ理論

ノリコ 個別的性質(トロープ)の存在を主張する諸議論にはある程度の説得力があったけれど、「トロープ一元論」のような極端な唯名論にはちょっと無理があると感じたわ。

ヨシオ トロープ理論はかならず唯名論のかたちをとらなければならないのかなあ?つまり、実在論と上手く付き合っていくことはできないの?

哲学史的に見れば、個別的性質(トロープ)に関する考察は、むしろ実在論の枠組みのなかで行われてきたと言ってよい。アリストテレスによる個別的偶有性についてはすでに述べたが、フッサールもまた、彼が「モメント」と呼ぶ個別的性質をスペチエスという普遍者の個別事例として捉えていた。個別的性質論における極端な唯名論的傾向はごく最近になって現れたと言っても過言ではない。

普遍的性質(普遍者)プラス個別的性質(トロープ)を認める存在論には、前節で検討した実在論からの反論が妥当しないという利点がある。フッサールが主として『論理学研究』第三研究で論じた個別的性質(モメント)と普遍者(スペチエス)との関係を分かりやすく書き直せば次のようになろう(Künne, 1983, 77)。

(IM) a は赤い。 (a ist rot)

この言明 (IM) は、実際には以下のような複合的な形式 (IM*) をもつ。

(IM*) a の個別的なモメントであり、かつ赤スペチエスの実例であるものが存在する。

ノリコ この理論では、「 a は F である」はいわば二段構えになっているのね。
 a は F トローブ (モメント) をもち、かつ、その F トローブ (モメント) は普遍者 (スペチエス) F を例化している、という具合に。

タカシ つまり、 a はそれ自身に固有の赤トローブをもっているのだけれど、同時にその赤トローブは赤という普遍者を例化している、ってことだね。このようにトローブと普遍者が共存する存在論では、少なくともどうやって赤トローブを集めてくるのかという問題は生じない。

グロスマンもフッサールの理論に対してほぼ同様の見解を示している¹²。グロスマンの分析は次の通りである。

- (1) a は白い (a is white) ;
- (2) b は白い (b is white) ;
- (3) c は緑色である (c is green)。

これら三つの事実は、実際には次の連言的事実である (I_1, I_2, \dots, I_n は個別的性質を指す)。

12 Grossmann, R. (1992), *The Existence of the World*, Routledge, 34.

- (1*) a は I_1 を所有し、かつ I_1 は白の実例である；
- (2*) b は I_2 を所有し、かつ I_2 は白の実例である；
- (3*) c は I_3 を所有し、かつ I_3 は緑の実例である。

タカシ うーん、この理論は實在論とトロープ理論の「折衷案」のようであんまり美しくないな。しかも、普遍的性質と個別的性質の両方を認めてしまうなんて気前が良すぎて…。少なくとも「第一部」で話題にのぼった「経済原理」からは外れていると思う。

ノリコ でも存在論における「経済原理」というのは、「不要なカテゴリーは消去する」という程度のものだと思うわ。だから、必ずしもより少ないカテゴリーの存在論の方が無条件で優れているってことにはならないはずよ。

ヨシオ 僕は、トロープのための弁明にも納得できたし、その後の實在論からの反論にも納得したから、両方認めたって良いと思うけどな。

われわれの「第一部」でも強調したことだが、個々の存在論は一つのシステム（カテゴリーの体系）として考察されなければならない。したがって、何をカテゴリーとして認めるかということも重要であるが、それらのカテゴリーがシステムの内部でうまく関係しあっているかということも重要なポイントとなる。やはり「第一部」で検討したアリストテレスのいわゆる「存在論的スクウェア」やロウの「四カテゴリー・システム」を見る限りでは、普遍者とトロープの双方を認めるシステムは、「トロープによる単一カテゴリー・システム」と較べてよりスムーズに機能しているように思われる。

7. 束理論としてのトロープ説の問題点

前々節では実在論の立場から、唯名論としてのトロープ理論、すなわち普遍者をトロープのクラスに還元しようとする試みが批判的に検討されたが、この最後の節では束理論としてのトロープ説を議論の俎上にのせたい。先に見たようにトロープ論者は、通常「個体」と呼ばれるものはトロープの和（束）に過ぎないを考える。こうした考えに対し、そもそも個体は性質の束（bundle）ではないし、ましてやトロープの束ではない、という反論がある（cf., Grossmann 1992, 33）。ここでのトロープ理論はいわゆる束理論（bundle theory）の一種と見なされている。束理論とは個体を性質の集積（束）として捉える説であり、その原型はイギリス経験論のなかに見出すことができる。ここで言われる「性質」とは普遍者であっても、トロープであっても構わない。それに応じて少なくとも二種類の束理論（個体を普遍的性質の束と捉える理論と個体をトロープの束として捉える理論）が区別されるだけである。

束理論全般に対する批判としてよく目にするのは、「束理論は、日常的な個体の変化を通じて同一に留まるというわれわれの信念をうまく説明することができない」という批判である。繰り返すが、束理論の「トロープ版」は、個体をトロープの束として捉える説である。ある束Aが一つでも新たなトロープを得る、あるいはすでにもっていたトロープを失う場合には、当然、数的に異なる束Bが得られることになる。したがって、変化という現象が生じるたびにわれわれは数的に区別される新たな束（＝個体）を得ることになってしまう、というのが批判の骨子である。しかし、この批判を束理論にのみ向けるのはフェアではないだろう。競合する説（実体・属性理論）もやはり同様の困難に直面するはずである。むしろより深刻なのはラックスが指摘する次の困難である。

ラックスによれば、束理論は主語述語形式をもつ言明をうまく説明することができない¹³。例えば、「タマ」と呼ばれるネコが存在し、タマに関する次の言

13 Loux, M. J. (2002) *Metaphysics: A Contemporary Introduction*, London: Routledge, 107-111.

明が真であると仮定する。

- (1) タマは黒い。
- (2) タマは長い毛で覆われている。
- (3) タマは2キロの体重をもつ。
- (4) タマは日本生まれである。
- (5) タマは肉のみを食べる。

東理論にとって、これら (1) から (5) までの言明はトートロジーに過ぎない。というのも、ある性質が帰属させられるタマはそれ自体、その性質を含む一つの束に過ぎないからである。つまり、黒トロープ+長い毛で覆われているトロープ+… (=タマ) という和(束)の構成部分は黒トロープである、と述べているのと同じことなのである。したがって、(1) から (5) のいずれの言明も真であれば情報量はゼロ (not informative) ということになるだろう。これはわれわれの直観に反する。もちろん東理論の信奉者は次のように反論することができよう。われわれは「タマ」という固有名で呼ばれる束がどのようなトロープから構成されているかを完全に知っている必要はない、と。もちろんその必要はない。しかしながら、情報量云々の問題は度外視したとしても、東理論が正しければ、真であるすべての主語述語文においては、個体(トロープの和)が必然的にその性質(当該の和の部分トロープ)をもつことになる。このことに変わりはないように思われる (cf., Loux 2002, 111)。カントの表現を借りれば、すべての述語概念が主語概念に含まれている以上、あらゆる(単称)肯定判断は分析的な判断ということになるだろう¹⁴。だが、これは多くの哲学者が望まない帰結であるに違いない。

トロープ論者(東論者)は、核となるトロープあるいは本質的トロープとそ

14 ここではさしあたり「分析性」と「必然性」との区別は等閑視することにする。

うでない（非本質的）トロープを区別することによって、こうした帰結を回避することができるかもしれない¹⁵。しかし、この「本質」への言及はいかにも実在論的であり、個別主義を標榜するトロープ理論とは相容れないことも確かである。

われわれは次の「第四部」において、「個別者」(particulars)、とりわけこの「第三部」においてたびたび話題に上った「個体」(individuals) カテゴリーに議論の焦点を当てることにしたい。このテーブルやあの椅子、この人間やあのネコといった、われわれにとってもっとも馴染みの深い対象はいかにして存在論的に分析されうるのか。この問いは、「普遍者とは何か」という問いと同様に、いやそれ以上に困難な問いであることが予想される。(アウグスティヌスが「時間とは何か」という問いについて語っているように、もっとも身近にあるものこそ、あらためてそれが何かと問われれば困惑してしまうものである。) さらに個体についての問いを難しくしているのは、それが時間の流れのなかで様々な変化を被るものとして考察されるからである。「同じものが変化する」という物言いは擁護されるべきなのか、それともたんに便宜的なものとして解されなければならないのか。こうした「同一性と変化」をめぐる諸議論も現代存在論・形而上学の主要なトピックスの一つとして「第四部」で取り上げるつもりである。

15 サイモンズの「核説」はこのような試みを代表するものである。ここで詳しく検討する余裕はないが、それはフッサールが『論理学研究』第三研究で論じたモメントおよびそれらのあいだに成立しうる「基づけ関係」を発展させた理論である。Simons, P. (1994) "Particulars in Particular Clothing", in *Philosophy and Phenomenological Research* 54, 553-575. この論文には優れた邦訳がある。「個別の衣をまとった個別者たち—実体に関する三つのトロープ説」、柏端他編訳 (2006)、『現代形而上学論文集』勁草書房。